

『源氏物語』の和歌を読む (十)

加藤 睦

一

木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を踏み分けける跡も見えぬを見わたして、とみにもえ出でたまはず。いとけしきある深山木にやどりたる鶯の色ぞまだ残りたる。こだになどすこし引き取らせたまひて、宮へと思しくて、持たせたまふ。

やどり木と思ひいでは木のもとの旅寝もいかにさびしから

まし

と独りごちたまふを聞きて、尼君、

荒れはつる朽木のもとをやどり木と思ひおきけるほどの悲し

さ

あくまで古めきたれど、ゆゑなくはあらぬをぞいささかの慰めには思しける。
(宿木卷)⁽¹⁾

◇「やどり木と…」詠について

荒れ果てた八宮邸を訪れた薫が、弁の尼に詠みかけた「やどり木と…」詠について、諸注は、初句に「宿りき(＝以前泊った)」の意との掛詞を認定し、一首を次のように解釈している。

・昔宿つたことがあると思ひ出さないならば、この山荘の旅寝もどんなにさびしいでせう。
(全書)

・昔かつてここに宿つたと思出さないならば、宿木の下(山荘)の旅寝も、どんなにか寂しい事であろうか。(思出すから、寂しくはないけれども)。
(大系)

・むかし宿つたことがあると思ひ出さないならば、この深山木のもとの旅寝もどんなに寂しいことだろう。
(玉上評釈)

・前にここに泊つたことがあると思ひ出さなかつたなら、この深山木のもとの旅寝もどんなにかさびしかったことであろう。
(集成)

・(ここにかつて姫君たちがおられて)自分も泊まつたのだという思ひ出がなければ、宇治の旅寝もどんなにかさびしいことであろう。
(新大系)

・昔宿つたことがあるという懐かしい思ひ出がないのだった

ら、この深山木の下の旅寝もどんなにか寂しいものとなった
だろう。
(新編全集)

確かに、「やどり木」の「木」に、過去の助動詞「き」を掛け
るということは、ありうることであろう。けれども、そこで不審
なのは、諸注が、もっぱら掛けられた意味すなわち「泊まった」
という意味だけを読み取って、「やどり木と思ひ出づ」という表
現そのものが意味することがらを、何ら考慮しようとしていない
ことである。

「やどり木と思ひ出づ」という表現そのものが意味するのは、
「宿り木であると思ひ出す・想起する」ということである。この
場合、宿り木という植物そのもの、ないし、「他の木に宿る」と
いうその属性を、薫が思い出しても何の意味もあるまい。したがっ
て、「やどり木」に込められた寓意を考える必要がある。

たとえば「なでしこ」の花は、その名から「いとしい子」をし
ばしば寓意するが、その際、「なでし」という部分は捨象される
のが常である。それと同様、ここでの「やどり木」は、「やどり
という部分だけが意味をなしていると考えてよいであらう。

やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月か
な
(東屋巻)

われもまたうきふる里を荒れはてばたれやどり木のかげをし
のばむ
(蜻蛉巻)

当該歌を踏まえて、後に弁の尼が詠んだ「やどり木は…」詠、
薫が詠んだ「われもまた…」詠において、「やどり木」は、薫に
とっての「宿り」すなわち八宮邸を寓意していることから、右
の推定は支持されるであらう。

「木のもとの旅寝」は、ひどく孤独な旅寝を意味するが、これ
に対し、「宿り」は、次の引用からも窺えるように、もつと人と
のつながりのある場である。

はつせにまうづるごとにやどりける人の家にひさしく
やどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあ
るじかくさだかになむやどりはあるといひいだして侍り
ければ、そこにたてりけるむめの花ををりてよめる
つ
らゆき

人はいさ心もしらずふるさととは花ぞ昔のかにほひける

(古今集・春上・四二・紀貫之)

当該歌において、「木のもとの旅寝」は、八宮邸の荒れてさび
しい側面を誇張した表現であり、「やどり(木)」は、八宮や大君
の記憶を伴う好ましい場所という側面を表現しているのである。
八宮邸は薫にとって「かつて泊ったことがある」だけの場所なの
ではなく、今でも身を寄せる好ましい「宿り」なのだと言じてい
るのである。

◇「荒れはつる…」詠について

弁の尼の返歌についても、諸注は、次に示すように、「やどり
木」に過去の助動詞との掛詞を認定している。

・荒れはてたこの住ひを昔宿つた所として思つてをられたと
は、亡き大君故かと、まことに悲しい事です。
(全書)

・荒れてしまった、朽ちた木(古い朽ちた尼)のもとを、昔か
つて宿つた所(宿木)と考えて置く(記憶している)ので
あった、心情の悲しさよ。(大君は今ではなくて、私だけなの

に)。「宿(寄生)木」に「宿りき」を掛けた。(大系)

・ 荒れはててしまった朽木のもとを、むかしやどつたとお思い
なっているのが悲しいことです。(玉上評釈)

・ 荒れ果てた朽木のもとを、前に泊つたことがあると覚えてい
て下さるにつけても悲しゅうございますー亡き姫君のことが
思われまして。「朽木」は、尼になってこの山里に隠れ住む
自分をいう。(集成)

・ (大君も亡く) 老耄した私しか残っていないこの邸を、かつ
ての宿りとして今も思い出してくださるとは悲しいことよ。
(新大系)

・ 荒れはてた朽木のような尼の住いを、昔の宿と覚えてくだ
さっているお心のほども悲しゅうございます。(新編全集)

「〜と思ひおく」とは、「前に泊つたことがあると覚えて下さ
る」(集成)、「かつての宿りとして今も思い出してくださる」(新
大系)のように、過去の記憶にのみかかるものではなく、「心に
きめておく。前もって考えておく」(日本国語大辞典 第二版)
という解説のように、現在や将来にも関係する心的過程である。

弁の尼の詠じた「悲しさ」は、もとより、八宮や大君が生きて
いた時代のことを思い出し、その時代が二度と戻らないことへの
嘆きと関係がある。けれども、諸注が読み取るように、薫が八宮
邸を過去のものとして思い出したと詠じたのだとすれば、そのこ
と自体は、決して悲しいことではなかったはずである。

薫は、荒れはてた八宮邸を、自分が身を寄せる「やどり」なの
だと詠じた、その今も続く思いを受けて、弁の尼は、改めて荒れ
はてた八宮邸のありさまを嘆いたのである。

二

尼君の方よりくだものまゐれり。箱の蓋に、紅葉、薦など折り
敷きて、ゆゑなからず取りまぜて、敷きたる紙に、ふつつかに書
きたるもの、隈なき月にふと見ゆれば、目とどめたまふほどに、
くだもの急ぎにぞ見えける。

やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月か
な

と古めかしく書きたるを、恥づかしくもあはれにも思されて、

里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月か
げ

わざと返り事とはなくてのたまふ、侍徒なむ伝へけるとぞ。

(東屋卷)

浮舟を伴つて旧八宮邸を訪れた薫に、弁の尼が詠み贈つた「や
どり木は…」詠と、それに対して薫が返歌ともなく詠んだ「里の
名も…」詠について、諸注の解釈はほぼ一致している。しかしな
がら、そこに示された理解には、それぞれ改めるべき点が存する
ように思われる。それについて一首ずつ考察してみよう。

◇「やどり木は…」詠について

この歌については、

・ あなたがかつて歌に詠まれた宿木は秋になつて色が変わつて
しまひましたが、月は昔に似て澄んでゐることよ。大君と浮

舟と住む人は変つたが、薫の真情は昔と変りないとの意を寓す。
(全書)

・(御身(薫)がかつて詠まれた)宿木(大君)は、浮舟に色(人)が變つてしまつた秋であるけれども、昔が自然に思出される月(御身)、しかも澄んでいた(情愛に變りのない)月(御身)であるなあ。
(大系)

・「やどり木は色かはりぬる秋なれど」しかし「むかしおぼえて澄める月かな」薫の心情は動かない、と喜んだのである。

女が姫宮から異母妹に變つてゐることを言われて「はづかしく、昔のままの心情と言われて「あはれにも」薫は感ずる。
(玉上評釈)

というように、上の句については、薫の愛する相手が大君から浮舟へ變化したことの寓意を読み取り、下の句については、變わらない薫の情愛の寓意が読み取られている。

しかし、仮に弁の尼がこのような含蓄すなわち、あなたの愛する女性は變つても、あなたの情愛に變わりはないというようなメッセージを歌に託したとすれば、かなり失礼な当てこすりの歌を贈つたことになるであらう。と同時に、そのような理解は、この歌を見て「あはれにも」と感じた薫の心情とも齟齬し、また、「古めかしく書きたる」と語り手が述べた、当該歌の受け止めかたとも整合しないであらう。

この歌の上の句からは、諸注が行っている詮索以前に、ごく当たり前に理解される意味があると考えられる。それは、八宮邸の衰え・變化である。

薫は、この後、荒れた八宮邸を「やどり木」によそえる歌を、

次のように詠んである。

われもまたうきふる里を荒れはてばたれやどり木のかげをし
のぼむ
(蜻蛉卷)

これと同様に、「やどり木は色かはりぬる秋なれど」という上の句は、八宮邸が寂しく變化してしまつたこと、具体的には、八宮も大君も亡くなり、中君ももう住んでいないということを指すと考えるのが穩当である。

・としふればあれのみまさるやどのうちにこころながくもすめる月かな
(後拾遺集・雜一・八三二・善滋為政朝臣・「題不知」)

・もろともにながめし人もわれもなきやどにはつきやひとりすむらん
(後拾遺集・雜一・八五五・民部卿長家・「齊信民部卿のむすめにすみわたりはべりけるにかのをんなみまかりにければ法住寺といふところにこもりあて侍けるに月を見つて」)

・あれたればかげもかくれぬ我が宿のにはのどかなる春のよの月
(古今六帖・第一・二八四・「はるの月」)

・つれづれとあれたるやどを詠むれば月影のみぞむかしなりける
(玄玄集・五九・帥大臣・「つくしより帰り給ひて」)

・山里にあれたる宿をてらしつついくよへぬらん秋の月影
(小町集・一〇・「山里にて、秋の月を」)

・ぬしなくてあれたる宿のそとには月のひかりぞひとりすみける
(能因法師集・二一八・「故公資朝臣の旧宅に一宿、月夜

詠之

このように、年を経て荒れまざる家と、昔のまま変化しない月を対比する趣向の歌は、くりかえし詠まれている。当該歌もまた、同じ趣向や構図を共有、踏襲している。そのように受け取る時に、初めて、「古めかしく書きたる」という語り手の言葉にふさわしい古風な歌としての享受が可能となる。

ここで八宮邸と対比されている月には、「月を薫に喩える」(集成)、「月」は薫をさす」(新編全集)と諸注が指摘するように、確かに薫が寓されていると思われる。ただし、そこからさらに薫の愛情に言及して、

・薫の真情は昔と変りない、(全書)

・澄んでいた(情愛に变りのない)月(御身)であるなあ。(大系)

・薫の心情は動かない、(玉上評釈)

というように、薫の真情・情愛の不変を意味すると説くのは、上の句の読みに照応させるために案出された深読みであると言わざるをえない。ここは、薫が八宮邸を忘れることなく訪れたことへの感謝がこめられていると考えればよいであろう。

以上のような解釈は、この歌を読んだ薫が「恥づかしく」思ったということと決して矛盾しない。

「恥づかし」は、対象に対して自らが劣っていることにまつわる感情に由来する言葉であり、

女が姫宮から異母妹に変わっていることを言われて「はづかしく」、(玉上評釈)

というような気持ちを意味しているのではなく、美しく澄む月に

自らがよそえられたことを受けて、その月と、自らの懸隔を「はづかし」と思ったと理解するのが自然である。

◇「里の名も…」詠について

この歌について、諸注は、

・宇治という里の名も昔のままで、世を憂しと嘆く私も昔のままだが、昔の人が面変りしたかと思われる(新しい女とともに(過す)閨の月影です。(集成)

・宇治という里の名も、世を憂しと嘆く私も昔のままだが、昔の人が面変りしたかと思われる閨の月影です。(新大系)

・世を憂きものと思うわたしも、宇治という里の名も昔のまま変らないのに、閨に射し入る月の光で見る人の面輪は昔のお方のそれとは変ってしまっておりませう。(新編全集)

というように、「里の名も昔ながらに」の「も」を、「世を憂しと嘆く私」と同列のものとして理解するとともに、「おもがはり」という言葉の意味内容については、薫の相手が女君から浮舟に変わったことを示していると解している。

確かに、この歌に、薫の世を憂しと思う心が投影していることは確かであろう。けれども、「里の名も昔ながらに」は、直接には、弁の尼の贈歌の「昔ながらにすめる月かな」を受けていて、「月だけでなく里の名も」と言ったと理解するのが正しい。

次に、「おもがはり」という言葉は、一人の人物が時の経過や境遇の変化によって示す容姿の大きな衰えを表すのが通例である。そのことは次に引く用例によって明らかであろう。

・いさらぬははやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはり

せる

(松風卷)

・今は世にあるものとも思はざらん、あやしきさまに面変わりしてふと見えんも恥づかしと
(夢浮橋卷)

・中納言の君は、上を見たてまつり給へば、さばかり若うさかりなりし御かたちの、いみじう痩せおとろへて、あらぬものに面がはりし給ひつつ、
(浜松中納言物語)

右のうち、初めの二例は、出家姿になったことを示す用例であり、最後の例は、老いにもなう変貌を表している。

そのような表現である「おもがはり」を、もともと別の人物である、大君から浮舟への変化に当てはめるのには、大いに無理があるだろう。

また、「おもがはり」という言葉の基本的な語義においても、大君と浮舟について言われているという理解は、大いに違和感がある。次のように、浮舟については、大君に容姿がよく似ていることが繰り返し言及されているのであるから、その二人の入れ替わりについて、「おもがはり」と言うことはありえない。

・…先つこ来たりしこそ、あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりしかば、あはれにおぼえなりにしか。
(宿木卷)

・つつましげに下るるを見れば、まづ、頭つき様体細やかにあてなるほどは、いとよくもの思ひ出でられぬべし。
(宿木卷)

・つつましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でられるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。
(東屋卷)

・白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはらめ、いと隈なう白うて、なまめいたる額髪の間など、いとよく思ひ出でられ

てあはれなり。

(東屋卷)

それでは、ここで「おもがはり」したと詠まれている「見し人」とは誰だろうか。

・花の色はむかしながらに見し人のかたちはことになりけるかな

(中務集・二〇五・「京極院の桜おもしろきを、ゆふぐれにむ」)のきんだちとめで見るに、蛇のはひのほりければ、ことさめて、むかしめでけん人にやなど)

・花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつるひにけれ

(後撰集・春下・一〇二・もとよしのみこ・「元良のみこ兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを、法皇のめしてかの院にさぶらひければ、えあふことも侍らざりければ、あくる年の春さくらへのえだにさしてかのざうしにさしおかせ侍りける」)

右のうち、まず「中務詠で、「見し人」は、昔「花の色」を見た人の意を表している。また、次の元良親王詠においても、「見し人」は、同じく「花の色」を見た人の意を表している。

もとより、後者の「見し人」は、詠者がかつて交際した人(兼茂朝臣のむすめ)と一致するので、ここからかつての妻、かつての恋人という意味を読み取ってもよいであろう。けれどもそれは、含意なのであって、基本的には、『後撰集新抄』が、

……見し人とは。即ち兼茂ノ朝臣の女をさしてのたまへるなり。さて此御歌にて見れば。此桜は。即ち女の家の樹などにやあらん。女と共に去年は見給ひし花の如くも聞ゆればなり。というように、花の色を「見た人」という意味を表している。

このように、右の二首では、「花（の色）」が変わらないのに、かつてそれを「見し人」は、姿や心が変わってしまった、という対照が基本構造をなしている。

以上のことを参照して、当該歌に立ち戻ってみよう。改めて確認すべきことは、「里の名も：」詠の「見し人」は、大君ではありえないということである。彼女は、薫にとつて「閨」という場において「見し人」、すなわち共寝の相手ではなかったということが、その理由の一つであり、大君から浮舟という入れ替わりを、「おもがはり」というはずがないということが、今一つの理由である。

「見し人」が誰なのかを考えるにあたっては、かつて見られたものが何であったかを確認する必要がある。一首の中で、それにあたるのは、閨に差し込む月光である。それをかつて見た人であり、今では「おもがはり」している人は、薫自身しかない。

・ いろいろかもむかしながらにさくらめどとしふる人ぞあらたまりける

（友則集・四・「桜花のもとにてとしおいぬるをなげきて」）
・ 昔みし春はむかしの春ながら我が身ひとつのあらずも有るか
な （新古今集・雑上・一四五〇・深養父・「題しらず」）

右の二首で、詠者は、桜・春の不変と自らの老いや衰えを対比して卑下している。それと同じように、弁の尼から美しい月によそえられた薫は、月と自分の間に示された比喩関係を切り離し、あなたのおっしゃるように、月は昔を思い出させる美しさであり、里の名も昔のままですが、その月が閨に差し込むのをおかして見たこの私は、八宮や大宮の死去の「うき」悲しみで、すっかり衰え

てしまいましたと、自らの衰えを嘆く歌を詠んだのである。

三

出でたまふとて、畳紙に、

あだし野の風になびく女郎花われしめ結はん道とほくともと書きて、少将の尼して入れたり。尼君も見たまひて、「この御返り書かせたまへ。いと心にくきけつきたまへる人なれば、うしろめたくもあらじ」とそそのかせば、「いとあやしき手をば、いかでか」とて、さらに聞きたまはねば、「はしたなきことなり」とて、尼君、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人にてなむ。

うつし植えて思ひみだれぬ女郎花うき世をそむく草の庵に」とあり。こたみはさもありぬべしと思ひゆるして帰りぬ。

（手習卷）

小野の尼の庵に身を寄せている浮舟の存在を知り、恋心をほめかした中将の歌に対し、返しをしようとしぬ浮舟に代わって、妹尼が詠んだ「うつし植えて：」詠については、諸注の解釈が一定しない。

・ 出家の私の庵につれて来て、この方のために苦労してしまひます。

（全書）

・ この人（女郎花）を、憂き世を捨てている私共の草庵に連れて来て、（私共に打解けて親しまないために）色々に心配苦勞をしているのであった。

（大系）

・ここへ移し植えてから、女郎花は思い乱れています。憂き世をのがれたこの草の庵で。
(玉上評釈)

・引き取りましてから、どうしたらよろしいものやら思いあぐねております。ここは(若い女にはふさわしくない)憂き世を背いた尼の住居ですので。
(集成)

・美しい姫君を憂き世を捨てた私どもの草庵に連れて来ましたが、どうしたらよいか思い悩んでいます。
(新大系)

・あの女をここに引き取ったばかりで、本人は思い悩んでおり、ご返事もさしあげられませぬ。俗世を捨てたつもり草の庵ですのに。
(新編全集)

諸注の解釈は、「思ひみだれぬ」の主語を、「私・私たち」妹尼たち」と解するものと、「女郎花」浮舟」と解するものと、大きく分かれている。

その二つの解釈は、構文の点からみれば、いずれも可能であろう。けれども、浮舟からの返歌がない代わりの詠歌であったという性格を考えると、本来は浮舟が自らの思いを詠むべきであったわけだから、多くの注釈のように、尼たちの困っている思いを伝えている歌と理解するよりも、浮舟は思い乱れている、だから本人からの返歌はない、というように、浮舟の心中を詠んだ歌として解するほうが自然であろう。

そのように、女郎花「浮舟が思い乱れていると解している玉上評釈は、そう判断する理由を次のように述べている。

諸注「思ひ乱れぬ」の主語を尼君として、ここへ連れてきてどうしてよいのかわからず困っている、の意に解している。

「うつし植えて」の主語は尼君だから、「思ひ乱れぬ」の主

語も尼君とするのである。だがそれだと、尼君の「思ひ乱れぬ」という内容が十分わからない。これまでの話でも、尼君はこの人を連れてきたため「思ひ乱れ」ている、とは記されていない。むしろ喜んでいる。それに「思ひ乱れ」ているのが尼君だとすると、中将の歌に対する返歌として機能しないのである。とすれば「思ひ乱れぬ」の主語は「をみなへし」と考えるべきであろう。この寂しい世捨人の庵に連れてきたため、「をみなへし」(この人)は思い乱れていて今ほとども御返事をするどころではありません、という意味に解したほうが、よく中将の歌にも対応する。

中将の贈歌に対する返歌の性格を重んじた右の見解は、きわめて妥当であり、従うべきであると考ええる。

以下、若干の補足を試みたい。

玉上評釈は、この歌を含む贈答に至るまでの叙述を視野に入れ、尼君の「思ひ乱れ」についての記述がないことを適切に指摘している。これに関連して、同じ叙述において、妹尼が、浮舟の「思ひ乱れ」について次のように語っていたことは、合わせて把握しておくべきであろう。

いかなるにか、いともの思ひしげきさまにて、世にありと人に知られんことを、苦し気に思ひてものせらるれば、

「移し植えて」詠の直前において、妹尼は、右の引用箇所を踏まえて、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人になむ」と言っており、右の「もの思ひしげきさま」と当該歌の

「思ひ乱れぬ」とが、直接に関連していることが窺えるのである。

次に、「うき世をそむく草の庵にうつし植えて」たことと、女郎

花が思い乱れていることとの関連について、補足を試みたい。王上評釈は、この因果関係について、「この寂しい世捨人の庵に連れてきたため」と述べているが、寂しい庵という環境は、浮舟の心境を考えれば、決して悪くはなかったはずなので、やや説得力が不足する感がある。この歌における理路は、女郎花という花が伴う「あだな女」というイメージによるところが大きいものと考える。

吹きみだる風のけしきに女郎花しをしぬべき心地こそす

れ
(野分巻)

女郎花みだるる野辺にまじるともつゆのあだ名をわれにか

けめや
(蜻蛉巻)

右の二首では、男との関係において女(女郎花)が心を乱すことが詠まれている。

このように男に心を乱しやすしい女郎花ととって、世俗を離れた「うき世をそむく草の庵」ほど場違いなものはあるまい。そのような草庵に移し植えられた女郎花が、どうすればよいのかわからず、通常とは別の意味で思い乱れているという矛盾が、一首の理路を支えているのである。

したがって、この歌の「思ひ乱れ」は、女郎花につきものの、あだなものではないことになる。妹尼は、女郎花が草庵に移し植えられていることで、「あだし野の風になびく」ことはない、中将を安心させるとともに、しばらくして心が落ち着けば、返歌もするようになり、中将の求愛になびく可能性も出てくるだろうと伝えたのである。

四

……帰りなむとするを、笛の音さへ飽かずいとおぼえて、
ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬ
と、なまかたはなることを。「かくなん聞こえたまふ」と言ふに、
心ときめきして、

山の端に入るまで月をながめ見ん闇の板間もしるしありやと
など言ふに、この大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたりければ、
さすがにめででて出で来たり。
(手習巻)

当該歌の「しるし」については、かつては、「闇の縁にさす光に胸の痛みも薄れませうかと」(全書)、「私の胸の痛みも、御身に近づく事によって明るくな(慰められ)る効果があるかと」(大系)のように解されていたが、現在は、

・では、山の端に沈むまで月を眺めておりましょう、その甲斐あつてお逢いすることもできましようかと。「板間」は、板葺き屋根の板と板との隙間。月の光が漏れ入る縁で言う。
(集成)

・山の端に入るまで月を眺めてみよう、その甲斐あつて(浮舟に)お逢いできるかと。「ねやの板間」は、寝室の屋根を葺いてある板の隙間。月影の漏れ入る縁で逢う瀬を願う。
(新大系)

というように、浮舟との逢瀬がかなうことを意味すると解されている。妥当な解であると考える。

当該歌では、まず「山の端に入るまで」と、「入る」という言葉が示され、ついでそれに縁のある「閨」という言葉が詠まれており、そこから浮かびあがる「しるし」は、おのずと「閨に入る」こと、すなわち浮舟との逢瀬を暗示する、というように、一首が構成されている。

残る問題は、「(閨の)板間も」という表現をどう理解するかということである。

玉上評釈は、この歌のわかりにくさについて、次のように述べている。

中将の歌の「ねやの板間もしるしありやと」はわかりにくい。(中略)宣長の『玉の小櫛』にいうように、「月」の縁語として「ねやの板間」が用いられたもので、月の光がしのびこむように、自分も入れてもらえることもあろうかと待っている、といった意味であろう。どうもこの歌は舌足らずである。

ここで言及されている本居宣長の説は、
閨の板間とは、月影のさし入ル縁の詞にて、浮舟君にちかづく事を、ゆるすにたとへたる也。

というもので、新編全集も引用しており、ここで適切に指摘された縁語関係については、大系以降の注釈書において、すべて肯定・踏襲されている。けれども、その宣長の指摘においても、現行の諸注においても、なぜ「板間」が詠まなければならないのかは説明されていない。

そこで、いったん「板間」から離れて、次の用例を参照してみよう。

いへにゆきてなにをかたらむあしひきのやまほととぎすひと
こゑもなけ (万葉集・卷十九・四二二七)

つゆばかりたのみおかなんことのはにしばしもとまるいのち
ありやと (亭子院歌合・六五)

秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居をかけれ時のまも見ん
(源氏物語・明石卷)

こひ侘びぬしばしもねばや夢のうちにみゆればあひぬみねば
忘れぬ (小町集・五〇)

つかのまももろともにとぞちぎりけるあふとは人にみえぬも
のから (大和物語・一四七段・兵衛の命婦)

右の傍線を施した表現において、係助詞「も」は、「ひとこゑ」「しばし」「時のま」「つかのま」といった、短いもの、わずかなものに接続し、願望・意志・仮定・命令表現と呼応して、「せめてくだけでも」という意味を表している。

このような発想・表現を参照する時、当該歌の「閨の板間も」という表現が意味するところも明らかになるだろう。「閨の板間も」は、せめて閨の板間ほどのわずかな逢瀬でもよいから遂げてみたいものだ、月を見続けていければ、その「しるし」があるか試してみたい、という控えめな願望を表現しているのである。

五

こなたにも消息したまへり。

おほかたの世を背きける君なれど厭ふによせて身こそつらけれ

ねむごろに深く聞こえたまふことなど、多く言ひ伝ふ。「はらからと思しなせ。はかなき世の物語なども聞こえて、慰めむ」など言ひつづく。「心深からむ御物語など、聞きわくべくもあらぬこそ口惜しけれ」と答へて、この厭ふにつけたる答へはしたまはず。

(手習巻)

この歌についての諸注の解釈は、かなり錯綜している。その原因は、「厭ふによせて」という表現につまり、一首全体の理路をつかみそこねているためであると思われる。

・ただ世の中一般が厭になつて出家された貴女ですが、何だか私を嫌つたためのやうで、自分が辛くてなりません。(全書)

・(私(中将)を嫌つたのではなくて)おしなべて(一般)のこの世を、捨てたのであつた御身であるけれども、(その捨てたのは)私を嫌うようにかこつけられるために(て)、どうも、私は自分の身が(情けなくうらめしい)い。

(大系)

・一般の世間を厭うて出家されたあなたですが、私を避けることにかこつけなさつて、この身が(玉上評釈)つらいのです。(私を嫌つてではなく)ただなべてのこの俗世に背いて出家されたあなたですけれども、しかし、その嫌うというにつけて、何か私が嫌われたやうでわが身が恨めしく思われま

(集成)

・世俗すべてを捨てたあなたですが、私を嫌つての出家かと思つて辛くてなりません。

(新大系)

・おおよそ俗世間を捨てて出家なさつたあなたですが、世を厭

うことにかこつけてじつはこの私をお嫌いになつてのことかと思えば、恨めしくてなりません。

(新編全集)

以下、「厭ふによせて」を核とする一首の構成について、明らかにしていきたい。

○「身こそつられ」

こいで用いられている「つらし」は、我が身のつたないありかたを対象化して、「ある事柄・情況・環境などが、身を切るように耐えがたい」意を表している(日本国語大辞典 第二版)。「身こそ」は、我が身と浮舟を対比・対照する構図を表して、一首全体として、

・おもひかねいまはわがみのつらきかななごうき人のこひしかららん

(江師集・一八六・「承暦二年四月廿八日、殿上歌合右方」)

なにしかは人もうらみむなつ引のいとかかりけるみこそつられ

(六条修理大夫集・一七・「かよひ侍りけるをとこのかれがれになり侍りにけるを、をむないかがいひやりたりけん、男とかくいひて、いたうなうらみそなどいひおこせたりしに、その女にかはりて」)

・あひそめぬほどこそ人をうらみしかうとまれぬればみこそつられ

(頼輔集・六〇・「同百首に、遇不遇恋」)

と同様に、相手と自分を対比して、相手のつれない仕打ち(出家)ではなく、自分のつたないありかたが堪えがたいと詠じている。

○「厭ふ」

この表現については、「私を嫌ったための「出家」(全書)、「その捨てたのは)私を嫌うようにかこつける」(大系)、「私を避けることにかこつけなさつて」(玉上評釈)、「私が嫌われた」(集成)、「私を嫌っての出家」(新大系)、「この私をお嫌いになつてのこと」「出家」(新編全集)というように、「私(中将)」を「いとふ」という行為の対象として補う解釈が行われている。

けれども、この「厭ふ」は、「おほかたの世をそむきける君なれど」という上の句を踏まえ、その「世をそむく」ことに内包されている「世を厭ふ」という要素から、さらに「世を」という具体的内容を捨象して言語化したものであり、そこに具体的内容(「私を」)を補って理解するのは誤りである。

○「よせて」

「よす」という言葉は、『日本国語大辞典 第二版』が示す多様な語義のうち、「(特に、歌論用語として) 関連づける。通わせる。縁語化する」と解説する意味を、ここでは示している。

・菖蒲草ねたくもおもふけふの日は君がころに我ひかれつつ
(為忠集・一八三・少将・「五月五日、恋をあやめによせてよめりける」)

・みさごゝるるいり江の水はあさけれどたえぬを人のころとも
がな (待賢門院堀河集・一〇四・「え(江)は、恋する」)

右の二首は、ともに恋歌であり、「あやめ」「え(江)」は、恋の主意とは直接関係ないものであるが、それを「ひかれ」「あさけれどたえぬ」などという修辭を介して恋に結びつけている。こ

のように、何かを何かに「よせ」る場合、その二つのものやこととの間に懸隔があることが前提となり、その上で連想あるいは言葉の縁などにより、二つを結びつけるのである。

秋風に山のこのはのうつろへば人の心もいかがとぞ思ふ

(古今集・恋四・七一四・素性法師・「題しらず」)

右の歌では、「山のこのは」と「人の心」という直接関係のない二つのものが示され、前者の状態を「うつろふ」と言語化したうえで、「人の心」の移ろいに思いをはせている。

色かはる浅茅を見ても墨染にやつるる袖を思ひこそやれ

(源氏物語・椎本卷)

右の歌で、源氏は、「色かはる浅茅」を見て、それと直接関係のない「墨染にやつるる袖」を、「色かはる」という共通点を介して思いやっている。

・山の端に入るまで月をながめ見ん閨の板間もしるしありやと

(同・手習卷)

・馴れきとは思ひいづとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ
「山の端に…」詠では、先に確認したように、月が山の端に「入る」ということから、浮舟の閨に「入る」ことが連想されている。

「馴れきとは…」詠の、「馴れきとは思ひいづとも」という表現は、一義的には、髭黒邸の真木の柱が姫君を「馴れき」と思い出すことを意味しているが、そこから転じて、髭黒が北の方を「馴れき」と思い出すことがあったとしても…、という意味が込められている。

このような歌からわかるのは、二つの関係のないものを結びつ

ける媒介として、何らかの言葉が機能しているということである。当該歌の場合、具体的内容が捨象された「厭ふ」がそれにあたる。その「厭ふ」を介する連想は、一首の中で、次のような経路をたどっている。

「世をそむきける」↓「世を厭ふ」↓「厭ふ」↓「(浮舟が中將を) 厭ふ」⇨「(浮舟から) 厭はるる(わが身)」↓「身こそつられ」

右の理路において、「よす」る思惟の前提となるのは、浮舟の出家と中將が浮舟から厭われることが、直接関係ないということである。そのことは、「おほかたの世をそむきける君なれど」という上の句が明確に示している。その上で、その出家から「厭ふ」という言葉を導いて、浮舟から「厭はるる」わが身の「つらさ」へと連想を及ぼしたのである。

中將が「身こそつられ」と嘆じた「身」のありかたは、もはや浮舟の出家とは直接関係がない。同様に「厭ふ」も、浮舟の出家の要因という狭い話題に制限されるものではなく、これまで浮舟から相手にされず、今もまた冷たくされていることを意味して、浮舟へのしつこい求愛につながっている。浮舟が「厭ふにつけたる答へ」をしなかつたのは、その求愛の文脈を無視しようとしたからである。

注

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』(以下「新編全集」と略称する)により、一部表記を改めた。他の諸注釈書に言及する場合は、以下の略称を用いる。「全書」(⇨『日本

古典全書)、「大系」(⇨『日本古典文学大系』)、「玉上評釈」(⇨玉上琢彌『源氏物語評釈』)、「集成」(⇨『新潮日本古典集成』)、「新大系」(⇨『新日本古典文学大系』)。また、勅撰集などからの和歌の引用は、『新編国歌大観』による。

(2) 「さくらの花は、昔そのままに美しく咲いているけれど、それを見て賞でた人の顔かたちは、すっかり変わってしまったなあ。おぞましい蛇になってしまつて。」(木船重昭『中務集 相如集注釈』大学堂書店・一九九二年刊)。

(3) 「このさくらの色は、昔のままで相変わらず美しいが、かつてこの花を見た、契つたあなたの心だけは、変わってしまったのですねえ。悲しいことです。」(木船重昭『後撰和歌集全釈』笠間書院・一九八八年刊)。

(かとう むつみ 本学文学部教授)